

Yamato Welfare Foundation
ヤマト福祉財団

ヤマトグループ賛助会員向け
ニュース(季刊)
発行部数12万部・非売品

2016.07.20 Summer

No.

51

NEWS



瀬戸理事長の塾長施設訪問

重症心身障がい者と家族のために

**医療的ケアもできる
福祉施設を**

熊本地震の被災地から報告

**安心を取り戻すために
動き出しています**



重症心身障がいの 子どもをもつ親の思い

2016年4月1日、念願であった重症心身障がい児者（以下：重心）の短期入所施設が、19床の診療所「医療型短期入所施設」として認可され開院することになりました。

キャンパスの会の最終目標である「死後」の「医療付入所施設」が、夢の実現に向け一歩前進したところです。

2004年5月、NPO法人キャンパスの会を設立し、我が子が地域で安心して暮らし、親亡き後も変わらぬ生活が送れるようにとの思いで、居宅介護、学童保育、*レスパイトケア、デイサービス、短期入所など、家族が一番欲しいサービスを提供し、子どもたちの通える事業を形にしてみました。

『働く場』の創出

重心の子どもたちに必要な紙おむつの仕入・販売を障がい者の仕事とし、通所者の給食作りからヒントを得て介護施設や病院・学校へのお弁当販売。短期入所に欠かせないシーツ、タオル、布団や病院・高齢者施設・レストラン・食品関係のクリーニング（リネン）。最近では地元農家と協同して新商品の開発事業、酒類販売事業所が「ふるさと納税」にも参入するなど、私たちは収益事業で障がい者の働く場の確保と雇用を結び付け、規模を拡大し、どんなに障がい者が重くても「働く」ということを大切にしてきました。

新たな挑戦

4月に開院した重心の施設は、予想をはるかに超えた重度の利用者さんの申し込みが多く、痰の吸引・経管栄養・導尿・気管切開部の衛生管理・酸素吸入・噴霧吸入・人工呼吸器の管理など、他施設で受け入れができなかった生後6カ月～50歳代までの百十数名の方が登録しています。看護師の対応をはじめ、施設でも安全な医療的ケアの必要性が出てきました。重心の施設を医療型に向けた一歩の難関は、専門性（小児科・内科）のある医師の確保でした。行政、保健所、医師会など多くの関係者に『子どもたちへの親の思い』が伝わって、その結果院長（小児科医）、副院長（内科医）、その他2名の内科医を含む4名の医師が協力を申し出て下さり、開院に至ることができました。

障がい種別の違いがあっても、分り合える境遇の親同士、地域のつながりの中で子どもたちの幸せ支援を続けたい。そのためには、行政任せではなく、親たちが悩み、考え、自ら動いて実現するしかないと考えています。

「自分らしく生きる」ことが自立ではないだろうか」

※レスパイトケア：障がい者(高齢者など要介護者)の在宅介護をしている家族の疲れを軽減するため、一時的に休息を取るようにするサービス

CONTENTS

表紙写真 熊本地震で震災直後から、1日3食、300食の炊き出しを行った(NPO)にはらたんぼぼハウス。事業所で開いているボランティア食堂

- 03 瀬戸理事長の塾長施設訪問
重症心身障がい者と家族のために
医療的ケアもできる福祉施設を
- 06 熊本地震の被災地から報告
安心を取り戻すために動き出しています
- 07 平成28年度 給料増額支援助成金、障がい者福祉助成金
全国で助成金の贈呈式を行いました
- 08 自然栽培パーティ 第1回全国フォーラム開催
- 10 この街で、一緒に生きていく。障がい者のクロネコDM便配達事業
チームがひとつになれば人数以上のチカラになる。
- 12 助成先レポートVol.26 (いなほ作業所 和歌山県東牟婁郡太地町)
クジラの町にたった一つのパーカリー

重症心身障がい者と家族のために 医療的ケアもできる福祉施設を



紙オムツの手配、給食、クリーニングなど、障がいのある方が必要とすることを一つひとつ自分たちの手で形にしてきたキャンパスの会。高齢者施設や地元の方からの依頼にも応え、弁当・配食サービス、レストラン、リネンサービスなど、次々と事業化して利用者さんの働く場を広げている（写真①AZMレストラン、②CBSリネンサービス都北、③施設外就労先の農業法人、④おべんとうのまるよし、⑤生活介護事業所なみき、⑥(株)丸佳、⑦障がい福祉サービス事業所はながしま・はながしま診療所、⑧CBSリネンサービス年見、⑨給食センターキャンパス）

キャンパスの会見学会日程

4月25日

- ・AZMレストラン
- ・障がい福祉サービス事業所 はながしま・はながしま診療所
- ・県内の就労支援事業所も交えた懇談会

4月26日

- ・おべんとうのまるよし
- ・株式会社丸佳
- ・CBSリネンサービス年見、CBSリネンサービス都北
- ・給食センターキャンパス
- ・生活介護事業所なみき
- ・施設外就労先の農業法人太陽ファーム

4月25・26日、夢へのかけ橋実践塾で弁当・配食サービス事業に特化した塾を指導する楠元塾長の施設・キャンパスの会を瀬戸理事長が訪問しました。

キャンパスの会は、さまざまな形で利用者さんに働く場を提供するとともに、介護・医療的ケアにも力を注いでいます。「4月1日、『障がい福祉サービス事業所はながしま』内に『はながしま診療所』を開設し、医療と福祉を一つの場所でケアできるようになりました。これは重症心身障がい者の母親として、私が長年求めてきた理想の形です」と楠元塾長は話しています。



「重症心身障がい者をお預かりする現場には、医師の手による医療的なケアがいかに必要かを痛感しました」と清山副院長



「木のぬくもりを感じる穏やかな空間で過ごしてほしい」。はながしは、宮崎県産材を使用することで県から助成も受けている

利用者さんの自立のために さまざまな形で「働く場」を創出

（社福）キャンバスの会は、弁当・配食サービス、食品加工、クリーニングなど、さまざまな形で利用者さんの働く場を提供しています。「1日のお弁当の製造数は、約2000食です。お弁当のまるよしや給食センターキャンバスで、お弁当を製造・販売し、官公庁、企業、病院、個人宅、高齢者のデイサービスの配食サービスも行っています」と楠元塾長。

株式会社丸佳でも、お弁当や惣菜などを製造。宮崎市JA会館内には、ランチタイムになると200人以上のお客様で賑わうレストランも運営しています。

クリーニング関連で訪ねたのは、企業や飲食店のユニフォームをつくりレンタルすることで固定客の獲得に成功したCBSリネンサービス年見。コインランドリーを改装したCBSリネンサービス都北は、病院、高齢者施設などの私物クリーニングを専門にしています。

「弁当・配食サービスの利用者さんの仕事は、お弁当の盛り付け、配達などです。クリーニングでは、アイロンがけ、折りたたみ、私物クリーニングの選別などを担当。他にも製麺、野菜づくり、野菜のカットや袋づめ、清掃作業などがあります。利用者さんは、それぞれ得意とする仕事で能力を発揮しています」。

中には技能を高め、後輩の指導係を兼任する利用者さんもいました。各人が仕事を誇りを持ち働く姿は、とても頼もしく見えます。

重症心身障がい者の自立とは

「食べて眠り暮らそう」

「知的や精神に障がいのある方は、働き給料を得ることで社会的自立を目指すことができます

すが、日常の活動すべてが大変な重症心身障がい者にとって、食べることや眠ること自体が自立です」と楠元塾長。今年4月に開所した「はながしま診療所」は、平成26年6月に建設した「障がい福祉サービス事業所はながしは」（以下、両施設をあわせて「はながしは」）の中にあります。はながしはを利用する方の中には、人工呼吸器や気管切開、また胃瘻などの手術をされている方が多くいらっしゃいました。

「私には、重症心身障がい者の子どもがいます。かつて医師からは長くて7年と宣告されましたが、医療の進歩は目覚ましく40歳を超えたいまも元気に暮らしています。私はずっと心配し続けているのは、親亡き後のこの子の将来。重症心身障がい者の入所施設は、全国的にもわずかで、医療的ケアが必要なため一時預かり（ショートステイ）ができる場も身近にありません。私は、子どもたちを安心して預けることができる施設を地元につくりたいと、12年前にキャンバスの会を立ち上げたのです」と楠元塾長。

瀬戸理事長は「東京都立小平特別支援学校を訪れた際、医療が必要な障がい児などを持つ親が大変な苦勞をして学校に通わせている現実を知りました。子どもたちが学校を卒業後、どこに通うことができるのか、本人と保護者をどうケアできるのが気になっていましたので、はながしはをぜひ見学したかったです」と述べます。

1人の利用者さんに

3人のスタッフ体制でケア

「はながしはの利用者さんの9割が医療型で、なんらかの医療的配慮を必要とします。通常の介護施設では、利用者さん1人に約1・7人のスタッフと言われていますが、ここでは看護師、介護士、送迎ドライバーと3人体制でケアして

**福祉の視点で医療的ケアを行う
それが親の求める理想形**

「本当に自ら建設されるとは思ってもいませんでした」と話すのは、はながしまの副院長 清山

はながしまを開設しました。
必要を訴えかけてきましたが、なかなか進展しません。「待っていてもダメ。自分たちで動き出さなければ」と考えた楠元塾長は、大半を自己資金で（県産の木材を使うことで一部助成）

います。移動や食事の途中、また眠っている間もいつ痰が絡み吸引が必要になるのかわかりません。入浴の際も、体を洗う介護士の側に看護師がついてサポートしています。これをお母さんたちは、毎日自分で行っているのですから、精神的にも肉体的にもギリギリの状態です」。



車から直接ベッドや車イスが建物に入れるように床の高さを調整。車椅子のタイヤを自動クリーニングする装置も床に設置した。雨に濡れないように屋根付きの車寄せにしている



医療用ベッドや入浴用設備をはじめ、すべてに重症心身障がい者をケアできる専用の体制を整えている

知憲医師。清山氏は、県議会議員でもあり、開設前から楠元塾長の相談を受けていました。「開所したのははながしまを訪れ、利用する方や介護・看護にあたるスタッフの姿を見た時、これは福祉施設ではない、医師の力が必要な医療施設だとわかりました。そこで医者としてなにかお手伝いさせてほしいとお願いしたのです」。清山氏と院長、さらに非常勤の医師2名の4人体制で週5日の診療を行い、保健所に診療所として認可してもらった体制を整えました。

「私を含め医師の多くは、重症心身障がい者の診療経験がほぼありません。たとえば、一般の患者さんの診察は1日1回程度が普通ですが、重症心身障がい者にはもっと多くの回数が必要で、こうした福祉的な経験・視点がなければ、親は安心して預けることができないのだと、はじめて知りました。重症心身障がい者へのノウハウを持つ国立大病院などで、一部ベッ

ドを用意しているところもありますが、多くて6床程度。はながしまは、19床で規模的にも全国初の試みとなっています」と清山氏。
楠元塾長は「19床のうち3床が畳です。添い寝が必要なお子さんいますから、親の要望を満たすためにいろいろな点で配慮しました」と説明してくれました。
**はながしまの取り組みを発信し
医療関係者に現状を伝えたい**
はながしまの登録者数は、生後6カ月〜50歳代の百十数名。宮崎県の重症心身障がい者は約650名と多くの方が支援を求めています。「はながしまでは、ショートステイと短期入所が可能ですが、現在、施設長（作業療法士）・看護師6名・介護士13名の体制で、これ以上の受け入れは厳しい」と楠元塾長はため息をつきます。
瀬戸理事長は「全国規模で考えると、在宅のみ、親の力だけで頑張られている方は大変な人数になると思います。さまざまな規制やお金の問題などを行政が対応する必要がありますが、私たちにもながでできるのか考えていきたい」と話しました。

障がいの重さを問わず、すべての方の「自立」を支援「(社福)キャンパスの会」

<p>介護・医療的ケアの場</p> <p>利用者さんや障がいのある方のケア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループホーム(3カ所) ・短期入所施設 ・生活介護事業所(2カ所) ・居宅介護支援、地域生活支援 <p>重症心身障がい者の一時預かり・短期入所</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい福祉サービス事業所 はながしま + ・医療型短期入所施設 はながしま診療所 	<p>利用者さんの働く場</p> <p>弁当の製造・販売</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おべんとうのまるよし(就労継続A・B型) <p>クリーニング(3事業所)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CBSリネンサービス ・早水・都北・年見(就労継続A・B型) <p>レストラン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・AZMレストラン 	<p>弁当の配食サービス</p> <ul style="list-style-type: none"> ・給食センターキャンパス ※他にも野菜の加工販売、農業法人への施設外就労(就労継続A・B型) <p>その他の働く場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・紙オムツ専門店キャンパス ・ふれあい市 ※酒類・野菜・総菜販売 ・配送センター ※酒類・野菜販売(就労継続A型)
---	--	---

(社福)キャンパスの会は、弁当の製造・配食サービス事業、クリーニング事業などで、利用者さんに多様な仕事を創出し、社会的自立を支援しています。また、生活介護支援として、生活介護事業所やグループホームの運営、居宅介護支援・地域生活支援などを複合して行っています。
今年4月、重症心身障がい者の医療的ケアを行う診療所を障がい福祉サービス事業所内に併設。「障がいの重さにかかわらず、それぞれが求める自立」を支援しています。





熊本地震の被災地から報告

安心を取り戻すために
動き出しています

被災施設をリサーチし
必要なものを財団で助成

4月14日に発生した熊本地震は、深刻な被害を及ぼしました。2カ月経過の今(取材時)は、仮設入居もはじまり少しずつ復旧が進んでいます。震源地の益城町と同じく震度を超える地震に襲われた西原村にある(NPO)にしはらたんぼぼハウス。上村加代子施設長は「真夜中に体が飛び跳ねるほどドスンと強烈な地震が来ました。渦を巻くような揺れに家中の家具は倒れ、足の踏み場がないほどでしたと話します。翌朝、地割れを避けながら車で事業所へ向かうと、すぐに利用者さんの安否を確認。「25名全員が無事とわかったときは、ほっとしました」。食堂を兼ねた事業所は大変な状況になっていましたが、ボランティアの方の助力でなんとか使える状態になり、避難所への炊き出しを開始します。

「約1カ月半、1回約300食を朝昼晩とフル回転でつくり続けました。みなさんの笑顔を見ると疲れも吹き飛ぶのですが、避難所に入らず車中泊している方、被災した家の中で不安に過ごしている方もたくさんいます。そこで約2600戸ある地域の戸別訪問をはじめたのです。食事を

とついていますか、物資は足りていますか、健康状態はいかがですかと一軒一軒巡っています」。温かい食べ物や人を勇気づけると話す上村さんに、財団は常温と保冷設備が整い、スूपジャーなどで温かいものも運べる移動販売車を助成することにしました。上村さんは、この機会に障がいのある方との新しいつながりを築こうと決意。「いまままで引きこもっていた方ともお話しでき、彼らを受け入れられる新しい作業所も建設しています」。新事業所では弁当の製造を行い、事務所やグループホームも併設予定です。

被災した障がい者を支える
福祉施設間のネットワーク

他にも震災で住まいを奪われた利用者さんを抱える(社福)わくわく障害者共同作業所ふれあいワークを支援します。「地震に襲われたとき、あるグループホームに電話が繋がらず心配して訪ねると、倒れた本棚やTVの間で4人の利用者さんが身を寄せ合い震えていました」とサービス管理責任者の里崎美香さん。他施設の利用者さんも含め、約50人が事業所で寝泊まりしていた時期もあります。「そんなとき、夢へのかけ橋実践塾の武田塾長や塾生が、食料、トイレトペーパーなどを送ってくれました。ふれあいワークは、武田塾の卒業生です。実践塾の塾生たちは、いまもつながっています。

現在、利用者さんは無事に新しい住まいを確保。財団は、グループホームでの生活に必要な家具や家電などの費用を助成する予定です。

こうした被災地の応援に日本障害フォーラム(JDF)熊本支援センターも奔走しています。各施設の悩みを聞き、上村さんたちと協力して障がいのある方の自宅を訪問。地震で散乱した室内の片付けも行っています。「相談できる仲間がいると本当に心強い」と上村さん。JDFの活動は現地を支えています。

平成28年度
給料増額支援助成金、障がい者福祉助成金

全国で助成金の 贈呈式を行いました



北海道支社



東北支社



関東支社



東京支社



北信越支社



中部支社



関西支社



九州支社



沖縄ヤマト運輸



佐伯代表は「自然栽培をはじめたいと言う施設があれば、私やパーティのメンバーがどこにでも駆けつけて指導しますよ」と呼びかけました



自然栽培パーティのブランド化を目指してオリジナルマークも制作



不可能と言われたリンゴの自然栽培を約26年かけて実現した木村秋則氏



「いま世界中の人々が安心安全な食材を求めている」と瀬戸理事長



農業で利用者さんにたくさんの仕事と給料を

自然栽培パーティ 第1回全国フォーラム開催

「無農薬・無肥料・無除草剤の自然栽培でつくったお米は付加価値が高く、給料増額につながる」と話す自然栽培パーティ*代表の佐伯康人氏をリーダーに、昨年「水稲自然栽培チャレンジ」を実施しました。五つの施設が自然栽培で米づくりに挑戦。さまざまな苦勞を乗り越えながら、秋には黄金色の稲穂が豊かに実り、想像以上の収穫を得ました。5月20・21日、愛知県の豊田市福祉センターで『自然栽培パーティ第1回全国フォーラム』を開催しました。

※自然栽培パーティは、一般社団法人農福連携自然栽培パーティ全国協議会として法人化しています。

全国に広がる自然栽培パーティの加盟施設などがつくった自然栽培の野菜、果物を直売するマルシェをホール前のロビーで開催。安心・安全な農産物に関心を持つ大勢の来場者で大盛況となりました

自然栽培パーティ第1回全国フォーラムのプログラム

5月20日

- ・開会挨拶
自然栽培パーティ 佐伯康人代表、ヤマト福祉財団 瀬戸 薫理事長
- ・記念講演「奇跡のリンゴが生み出す新しい奇跡」 木村秋則氏
- ・自然栽培パーティ活動報告
- ・パネルトーク「障がい者と食と地方から、日本を変えよう」

※木村秋則氏、加藤良典氏（豊田市障がい福祉課）、野中慎吾氏（農業生産法人みどりの里）、磯部竜太氏（社会福祉法人無門福祉会）、里見喜久男氏（コトノネ編集長）、佐伯代表

5月21日

- ・佐伯さんの米作り講座（田植え作業）

障がいのある方ので 安心・安全な新しい食文化を発信

フォーラムには、全国から福祉関係者、農業生産者、消費者など約500名が集いました。佐伯氏は「いま自然栽培パーティの加盟施設は、北海道から沖縄まで、27施設に広がっています。安心・安全な食材を障がい者と一緒につくり、日本を健康にしていきたい」と挨拶。瀬戸理事長は「日本には、富山県ぐらいの耕作放棄地があると言われていました。この土地を障がいのある方の力で再生できたら、素晴らしいですね」と話しました。

記念講演は、「奇跡のリンゴ」で有名な木村秋則氏です。「だれもが不可能と言ったリンゴの自然栽培の実現に26年かかりました。いま私の栽培方法が、障がいのある方のために役立っていることを、誇らしく思います。私は、自然の力を借り



施設関係者から一般消費者まで、来場者が日本の農業と食の未来に新たな期待を寄せています



自然栽培を実践した施設は、共通して「自然栽培をはじめ利用者さんみんなに笑顔が広がりました。もっと規模を拡大していきたい」と報告しています



農福連携で私たちが変わっていきたくと来場した施設関係者も積極的に意見を発表

農業は百姓。百の仕事があるから 利用者さんに合う仕事も見つかる

て農作物が育つお手伝いをしていただけです。農薬も肥料も使っていないので、私のリンゴは、自然の栄養しか吸収していません。日本は医学先進国ですが、病気の多い国でもあります。それは、長年、食してきた食べ物に含まれる人工のなにかが影響しているせいかもしれません。安心・安全な食べ物を栽培し、供給することで、日本を健康的にリニューアルしていきたいですね」と語りかけました。

続いて木村氏が実践した自然栽培で、米づくりを行った施設が成果を発表。水稲自然栽培チャレンジに参加した施設の中では、(株)アップルファーム大地の恵みが最も平均給料が高く6万4000円になりました。数字には見えない、苦労や喜びなどを各施設が報告すると、会場から拍手が贈られました。

パネルトークでは、豊田市で水稲、野菜、果樹など幅広く自然栽培を行う農業生産法人みどりの里の野中慎吾氏が、農家の視点から農福連携の体験を紹介。「A型、B型の事業所の利用者さんに仕事を手伝っていたいです。工夫したのは、一つの仕事を細かな作業に分けることで、全員が参加できるようにすることです。最初は、無口だった利用者さんが、仕事を覚える度に明るくなり、いまではスタッフに「この収穫方法を教えるまでになっています」と話しました。佐伯氏も「農業に従事する者を百姓と呼びますが、文字通り百の仕事があり、それぞれに適した仕事が見つかるはずですよ」と解説しました。

「いま日本の農業は転換期を迎えています」と木村氏。「障がいのある方と一緒に、日本から新しい食文化を、栽培方法を発信し、世界中に農業ルネッサンスを起こしましょう」と呼びかけました。

第3回 新塾(熊田塾)

農業を行う塾生がフォーラムに参加



フォーラムには、農業を事業の柱にする夢へのかけ橋実践塾の新塾生と熊田塾長も参加。翌日行われた佐伯氏による米づくり講座の田植えでは、瀬戸理事長と一緒に、1本1本疎植える自然栽培独自の方法を体験しました。熊田塾長は「自然栽培、オーガニックなどいろいろと学ぶ中から、自分たちに合ったやり方を選択することが大事です」と塾生に話しています。

フォーラムの前日、5月19日には、安城市で第3回新塾(熊田塾)の研修会を開催しました。塾生の近況報告を聞いた熊田塾長は「1月にいくつかの塾生施設を視察しましたが、共通する課題は、栽培した農産物や加工品などを、どこで、どのような形で販売するかです。いま塾の中では、『早月農園』で育てたミカンを『なでらの森』の乾燥機でドライフルーツにし、『ワークセンターひびき』で販売するといった連携も生まれています。塾生同士で互いの特徴を理解し合い、自分の施設と連携することで、どのようなメリットを生み出すことができるのか、じっくりと考えてください」と講評しました。

研修会では、二つのグループに分かれ、一つの施設を例に改善点を分析し合うグループワークも実施。事業所のリーダーとして他の職員を説得するための表現力や意見をまとめる力などを養いました。

最後に熊田塾長が「農福連携は、社会での福祉施設存在を高める機会でもありません。利用者さんのためだけでなく、地域社会が抱える人手不足、後継者不在、食育などの問題も踏まえ、自分たちにながてできるかを、地域の方と一緒に考えていきたいと思います。それをきっかけに地元、県、全国へと広がるネットワークを築くことも夢ではなくなっています」と伝えました。



この街で、
一緒に生きていく。



公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコDM便配達事業

チームがひとつになれば 人数以上のチカラになる。

神奈川県横浜市の南側に位置する港南区に、就労継続支援B型事業所「フラワーロード」があります。クロネコDM便の配達地域は、港南区中央部の芹が谷4丁目という住宅街。起伏に富んだ地形で、急な坂や階段が多いエリアです。

「フラワーロード」は1996年、芹が谷地域では初めての地域作業所としてスタートしました。始めた事業は花屋さん。多くの人が施設に併設する店舗を訪れることで、障がい者への理解につなげたいと思ったのです。

クロネコメール便配達（後にクロネコDM便配達）を開始したのは、隣の地域の施設から情報を得たことがきっかけです。街に出て行く仕事を通して、利用者さんが社会との関わりを増やすことができるのではと考えました。

スタートして8年。現在の配達数は1日平均約100冊。希望者による午前チームと、固定メンバーの午後チームの2組がそれぞれ職員1人とともに配達しています。

選抜チームは 5人でひとつのチカラ

「フラワーロード」三好隆生主任は、午後のチームについてこう話します。



仕分けをする選抜チームのメイトさんたち。漢字の得意な人がリードします。

「メイトさんの仕事には、仕分け、登録、投函など、さまざまな役割があります。それを一人で担えないなら、みんなで力を合わせれば良いと考えました。そこで、それぞれの役割で力を発揮できる男性3名女性2名を選抜してチームを組み、ある小さなエリアを任せてみました。」

その選抜メンバーは①地図係、中川太郎さん。住所と名前を確認し、地図を見ながら配達先まで案内します。出発する時は必ず「行くよ〜」、道路を渡る時は「渡るよ〜」と声をかけます。②機械係、松島裕子さん。端末を操作して、ピッと鳴るのを確認します。③ガラガラ係、新井光一さん。DM便を入れたカートを押したり引いたりします。④安全確認係、酒井綾子さん。車が来ることを知らせ、みんなに注意を促します。端末が操作しやすいように、宛名部分を平らにするお手伝いも。⑤お助け係、スパーマンの長岐和透さん。一番後ろから全体を見渡して、困ったことがあれば助けます。背の高さを生かして、高い位置のポストも担当。5人が連携してこなす仕事ぶりを、職員は遠くから見守っています。

●横浜主管支店 横浜芹が谷センター

面積2.005km²/人口28,713人/世帯数11,565世帯

●特定非営利活動法人F&H

就労継続支援B型事業所「フラワーロード」

2008年からクロネコメール便（DM便）配達を開始。1日平均配達数、約100冊。野菜や花を育てて販売。栽培したひょうたんをランプに加工して販売、など。

「障がい者のクロネコDM便配達事業」

参入施設数 305施設 従事者数 1,581人（2016年5月現在）

お問い合わせは……（公財）ヤマト福祉財団 DM便担当

TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165

http://www.yamato-fukushi.jp/

※ 2015年4月1日より、クロネコメール便配達はクロネコDM便配達へと変わりました。



住所と宛名をしっかりと確認してから投函する煤賀康司さん。



DM便ですと、明るく手渡す半田沙也香さん。



楽しそうに配達する新井光一さん。

(左) 急な階段を助け合って上る午前チームのメイトさんたち。左から半田沙也香さん、職員の佐藤洋子さん、カートを持ち上げる山野義行さんと竹島航介さん、午前チームのリーダー隈部聡さん。

(右) 午後の選抜チームのメイトさんたち。みんなでチカラを合わせて配達しています。(向かって左から) 長崎和透さん、新井光一さん、酒井綾子さん、松島裕子さん、中川太郎さん。酒井さんと中川さんが次の配達先を指差しています。

仕分けはゆっくり たっぷり時間をかけて

選抜チームは、午後の仕分けを三好主任や他の職員と一緒に進めています。メイトさん一人ずつがDM便の住所と宛名を読み上げると、職員が地図にマーク。「4の27の3」というように、住所の読み方も覚えめました。DM便を番地別に積み重ねたら、職員が地図にマークした配達先を線で結び、歩く方向へ矢印をつけます。地図係の中川さんと相談しながら、「青いポスト」「やさしい野菜無人販売所」など、目印になるところを付箋にメモして添付。2冊同じ家に配達する場合や1軒に表札が2つある家のDM便にも、間違えないように付箋を貼り付けます。最後に、職員が地図を見ながら配達順に名前を読み上げて、メイトさんがDM便を配達順に並べ替えると、仕分けは終了。

選抜チームの約30冊の仕分け作業には、たっぷり30分近く時間をかけました。

階段の多い町を 助け合いながら

午前チームのリーダーは隈部聡さん。地図や住所に詳しく、端末操作も得意です。配達用のカートは大きなゴミ箱で作られた施設のお手製。DM便を配達順に重ねて入れてあるので、蓋を開けると次の配達先が確認できます。しっかりと密閉されて

「引く張って行くのではなく、後押しするのが職員の仕事。選抜チームはいまではサポートの必要もなく、なかあっても自分たちで解決しています」と話す三好隆生主任(左)とF&H磯田巧理事長。



いるので、雨にも濡れません。

配達区域は坂が多く、階段がいたるところにあります。配達エリアの90%以上が一户建てで、多くの玄関前に階段があります。しかも、ポストは階段上のドア付近にあることがほとんど。配達エリアは小さくても、運動量はとても多いといえそうです。

「一人暮らしがしたいとか、旅行がしたいとか。そんな仕事を通して生まれたみんなの夢を、サポートしていきたい」と三好主任は語ります。

まかせて安心 もっと密な関係に

ヤマト運輸横浜港南支店 野本哲志支店長は「坂と階段が多く、ヤマ



「フラワーロード」のメイトさんたち。中列/ヤマト福祉財団関東支部 春真児事務長(左端)、職員 佐藤洋子さん(右端) 後列左から/職員 興津武彦さん、1人おいて、三好隆生主任、ヤマト運輸横浜主管支店サービスセンター 生駒千尋課長、ヤマト運輸横浜港南支店 野本哲志支店長、2人おいて、職員 小野旬江さん、F&H 磯田巧理事長
ホームページ <http://npo-fandh.com/> ブログ <http://blog.livedoor.jp/fandh/>

ト運輸のドライバーも苦労しているエリアです。徒歩による配達も丁寧で、クレームも誤配もほぼありません。まかせて安心です」と話します。ヤマト運輸横浜主管支店サービスセンター 生駒千尋課長は「メイト連絡会にも積極的に参加してもらっています。これからはこちらの情報を伝えるだけでなく、みなさんからの意見も聞いていきたい。今後が楽しみです」と期待を込めました。

店頭には、たくさん季節の鉢植えや切り花が並べられている「フラワーロード」。DM便を届ける先々にも、色とりどりの笑顔を咲かせています。

クジラの町にたった一つのベーカリー

那智勝浦町で1982年に発足した〈いなほ作業所〉は、パンの移動販売・卸しに特化。実直に商品の品質向上に努め、年間売上約2630万円、平均月給2万4205円（2015年度）の実績を誇ります。そんな彼らが待望のベーカリーを手に入れました。

Data

社会福祉法人いなほ福祉会
いなほ作業所「いなほのパン屋」
和歌山県東牟婁郡太地町



3



1

時は来た。待ち焦がれた船出

県道をはさんで海の見えるペランダにはカウ
ンターとイスが数脚——。潮の香りが感じられ
るイトインスペースから目をこらせば、漁港の
一角でイルカがジャンプしました。

紀伊半島の南部、ここ太地町は古式捕鯨の発
祥の地。そんな漁師町に昨年12月オープンした
のがいなほのパン屋です。

隣町の那智勝浦町で34年前から活動をつづけ
るいなほ作業所は、店舗を持たず移動販売を
中心に学校給食やスーパーへの卸しに徹して、
高い給料を実現させてきました。しかし、さらなる
成長と給料アップを目指して、満を持して挑
むのが初の店舗販売です。

「自前出店してはどうか、という声はかねが
ね理事会から上がっていたんですが、なかなか実
現できなくて。施設定員も一杯で、新たに利用者
を受け入れるにも職域を拡大せにゃならん……」
と理事長の掛橋郁雄さん。「そうこうしているう



2

ちにこの土地を見つけて『よし、やってみるか』
と 出店資金の一部に当財団の助成が充てら
れました。

調査にじっくり足かけ2年

なぜ、初のお店を太地町に開いたのですよ
う？ 出店調査を担当したのが、現在は管理者
の生熊映さんです。

「那智勝浦町にはパン屋さんめっちゃめっちゃ多い
んですよ。これは敵しいという話になり、人口割
合なんかを調べてみると太地町が狙い目じやな
いかと。何よりパン屋さんがないし、スーパーも
漁協が経営する1店のみ。そこで太地町に絞っ
て、交通量の多い道や学校周辺の土地を見て回
りました」

土地を探し始めたのは2013年の夏ぐらい
から。金銭面で折り合わなかった物件もありま
したが、人に訊いたり、自分たちの足で探し回る
うちに見つけたのが、眺めの良いこの土地です。
幸い、所有者も「使ってもらいたい」と快く



①紀州材を使ったぬくもりのある店内。壁の漆喰塗りにスタッフ総出で。②店の前が太地漁港。ベランダからはイルカが跳びはねる姿も見える。台風が多い土地柄にあった下見張りの外壁を採用した店舗。③防腐剤が入っていないくて安くて美味しいと評判の『いなほのパン』④「無認可の時代は一般的な内職を。1999年ころから事業がパンの製造に変わりました」と掛橋理事長。⑤「サンドイッチはもっと小さく切って、ひと口サイズで販売したほうがいいとか、利用者のお母さんからもアドバイスいただけます」と生熊さん。⑥ひよんなことからパン事業に踏み出した経緯を語る細野さん。⑦店舗を設計した熊野くらし工房の森岡茂夫さん。「地域の技術と材料を使って、文化を継承しながら地元で還元できるように考えました」⑧簡単な飲み物のメニューも。⑨本日のお店担当の利用者さんとスタッフ。⑩那智勝浦町のいなほ作業所本部はパン製造の拠点。⑪現在、1日平均、菓子パン350個、食パン70斤、パンドミ35本を製造。

労働組合支部執行委員長 助成先訪問 Series 21

ヤマト運輸労働組合
和歌山支部執行委員長
浜田 明宏 さん



パンの美味しさもさることながら 利用者さんの働くさまに目を見張りました

「このパンは美味しい」という、地元の評判を耳にしていたので、今回の訪問を楽しみにしていました。

以前にもこの「助成先訪問」で、よその福祉施設にお邪魔しましたが、利用者さんの動きが、まったくちがうのに驚きました。というのも、みなさん静かに指示を待つこともなく、流れるようにパンを作っている。次の作業を自分で考えて、自発的に行動に移されていたからです。

当社のセンターにも美味しいパンをぜひ販売に来ていただけたら助かります。



応じてくれました。
開店初日は天候にも恵まれ大盛況。「歩いていける距離にこんなお店ができてうれしい」との声も聞け、その後の評判も上々です。

起死回生を招いた「学校交流」

「パンというのは偶然の産物やっただんです」
今ではほとんどの収益をパンで稼ぎ出す「いなほ作業所」ですが、きっかけはたまたまだったと語るのは前任の管理者の細野建設さん。

「無認可の時代が長かった（いなほ作業所）は1998年の法人化に際し、認可施設として授産種目を増やし、利用者の経済的自立をなんとか支えたいと考えていました」
そこで試みたのが、配食サービスとクッキーの製造です。地元高齢者とネット販売で全国を相手にする計画でしたが、設備投資の甲斐なく、いずれも「ぼしやりました」。

そんな折り、近くの小学校から「交流をしたい」との申し出が…。企画として小学生といっしょに焼いたパンが、転機を呼び込みます。できたパンは誰もが予期せぬ美味しさ。「これだったら給食用に注文したい」と、校長先生から提案が上がったのです。

「当時、僕らにはろくな技術も知識もなかったんですが引き受けました。（笑）でもそこから、これじゃいかんと勉強を始め、老舗のパン屋さん1年間、指導を仰いだりして、今はおかげさまで、自信を持ってパンを販売できるようになりました」

目下の目標は店舗売上1日平均3万円です。「そうすれば、給料が月3万を超えるはずなんです」と生熊さん。注文配達やお客様から要望の出ている営業時間の拡大といった方法で売上増を探りつつ、「無理をしない形で広げていきたい」と、そう最後に展望を明かしてくれました。

夢へのかけ橋実践塾活動報告

第3回 新塾研修会

亀井塾長と食品製造の塾生施設へ

6月15・16日、亀井塾長による第3回研修会を開催。初日は、グループホームなどへの配食やタイカレー缶詰を製造する杉並区の塾生施設『あけぼの作業所』を見学しました。「缶詰とは思えない美味しさ。デザインもお洒落」と塾生たちが評価。亀井塾長は「配食より外部から収入を得るタイカレーに力を入れるべき。今あるキッチンカーを缶詰と同じデザインでラッピングし移動販売をはじめては」と売上拡大の助言をしました。翌日は、川口市の塾生施設『晴れ晴れ』へ。利用者さんは、パンと焼き菓子の2チーム。商品の目玉は、川口銘菓として地元も期待するペーゴマクッキーです。

亀井塾長は「4月に視察した大阪の『青い鳥』も商品のクオリティが高く、みんな自信を持っていいと思います。必要なのは、企業などの大量注文に対応できる設備、働く環境を整えること。4月5日の原価計算勉強会で学んだことを活かし、目標の給料に必要な売上額・製造数を明確にしてください。どうやって達成するか四六時中考えてほしい」と激励しました。次回は塾生施設『かしのみ』を視察します。



『晴れ晴れ』を見学(左)、『あけぼの作業所』のタイカレー(右上)、『青い鳥』の製菓班

熊田塾長から視察した塾生施設の感想を聞く

5月19日の第3回新塾研修会で、熊田塾長がこれまで視察してきた3施設の感想を伝えました。

「大型乾燥機でドライフルーツを製造する『なでらの森』の課題は、新商品の開発と販路の拡大です。他の塾生と連携していますが、地元の農家や企業との可能性もぜひ検討してください。『菜の花』は、町の協力を得て、使われていない農地や耕作機械を活用し、自然栽培を開始しようとしています。いま行っている農法で従来の売上を確保することを前提にして計画を立ててほしいと思います。『赤城の家』は、標高300mと農作物を育てるには、厳しい環境ですが、もと鉄工所の強みを活かし、落花生の焙煎機などを自分たちで製作していることに驚きました。今後は、福祉施設としての強みも活かし、売上の主力であるネギの作付け面積の拡大に力を注いでください。」

熊田塾長が呼びかけているのは、地域に根ざしたネットワークづくり。これは全塾生共通の課題です。



塾生施設の見学勉強会(左：菜の花、右：赤城の家)

第2回 5万円必達塾研修会

企業から経営理念や人材育成を学ぶ

「地域で成功している企業から、福祉施設が学ぶべき点は多い」と武田塾長は話します。4月15・16日に開催した第2回 5万円必達塾研修会は、山梨県甲府市の塾生施設『かしのみ』で見学会を行ったあと、長野県伊那市にある「いい会社をつくりましょう」を社とする『伊那食品工業』へ。

「会社を永続していくために大切なのは、社員のモチベーションを保つこと。銀行がお金を貸してくれない厳しい状況の時でも、創業以来58年間一度も給料を下げたことはありません」とふれあいサービス事業部の丸山勝治取締役事業本部長。

「会社は人を育てることで成長します。知識だけではなく経験を通して、知恵を身につける、周りが見える、気づくことができる人間を育てることで、会社の大切な財産『信用』を築くこともできるのです」。塾生たちは、利用者さんへの指導方法のよい参考になると、丸山氏の話を中心にメモしていました。

翌日は、かしのみに戻って塾生が現状を報告。武田塾長は「塾がはじまってそろそろ1年、それぞれが壁にぶつかっているようですね。いまの方法で本当に5万円に到達できるのか、再度検討してみましょう。自分たちの組織、事業を見つめ直し、プラス点とマイナス点を冷静に把握した上で計画を立て直す。それが今後の成否を分けます」と激励しました。



かしのみラボで第2回研修会を開催
(一番下：見学した伊那食品工業)

YWF TOPICS



最新設備が整った市場で行われた活魚の初セリ



「サケの遡上に間に合うよう仮設市場を助成いただいたことが大きかった」と南三陸町の佐藤町長(左)



志津川湾から見た本市場(左)と仮設市場(右)

助成した仮設市場の設備も活用、南三陸町に待望の本市場が完成しました



「おらほ(わが町)の誇りとなる立派な市場ができあがった」と喜びに湧く南三陸町で、6月1日、「南三陸町地方卸売市場(以下、本市場)」の完成式典が開催されました。東日本大震災生活・産業基盤復興再生募金では、南三陸町に仮設魚市場の建設やスラリー製氷機などを助成しましたが、これら設備も本市場に活用されています。

佐藤 仁町長は「震災から5年、多くの方に支えられてここまで来ました。仮設市場の助成は、復興への大きな一歩となったと感謝しています」と挨拶。瀬戸理事長は「この市場から南三陸町にたくさん笑顔が広がることを楽しみにしています。」と話しています。

※HACCPとは…食品の製造工程において海外から求められる安全基準を満たすための衛生管理手法です。

みに行っています」とお祝いの言葉を贈りました。

本市場は、衛生・品質管理を徹底するため、外部と遮断できるように荷さばき場を密閉型にし、場内に入る際も滅菌エリアで手洗い、長靴の洗浄を行うなど、志津川湾の豊富な海の幸を安全に海外にも送れる HACCP対応になっています。当日行われた初セリでは、仲買人がタブレットを使用。宮城県漁業協同組合 志津川支所運営委員会の佐々木 憲雄委員長は「最新の市場としていろいろな試みを行っていますが、みんなでよい市場に育てていきたいですね」と話しています。

本市場の施設概要

敷地面積：14,951.77㎡

岸壁延長：170m

主要施設：荷さばき場、冷凍庫、魚市場関連事務室、会議室、仲買人控室、試験室

主要設備：製氷(スラリー氷)・貯氷設備、排水処理設備、海水滅菌(電解・紫外線)・貯水設備、給排水設備など

ステップアップセミナーを京都で追加開催

「利用者さんの働く力を伸ばし給料アップを目指す」新堂塾生を募集

好評を得た2月の新大阪に続き、6月11日に京都で『ステップアップセミナー』を開催しました。

新堂塾のアドバイザーで東京学芸大学の菅野 敦教授が「利用者さんの能力を高めるアプローチと現場づくり」について講演。新堂塾長は「職員には、新しい仕事を獲得する営業努力も必要です。利用者さんのために、なにかできるのかを考えていきましょう」と話しました。

お二人に学び実績を上げた元塾生3人は、「給料が増えれば、利用者さんの仕事振りも表情も大きく変わってきます」と現場で実践してきた体験談を報告。

「その喜びをみなさんも新堂塾の同窓生となって共有してほしい」。菅野教授は、約150名の参加者に7月から募集する塾への参加を呼びかけました。



第17回ヤマト福祉財団小倉昌男賞 募集

障がい者の仕事づくりや雇用の創出、拡大、労働条件の改善などを積極的に推し進め、障がい者の自立支援に取り組んでおられる方を

『第17回ヤマト福祉財団小倉昌男賞』にご推薦ください。

正賞 雨宮淳氏作 ブロンズ像「愛」

副賞 賞金100万円

募集期間 平成28年7月1日～9月15日

詳しくはホームページをご覧ください。

<http://www.yamato-fukushi.jp/works/award/>



ダリ展



サルバドール・ダリ『子ども、女への壮大な記念碑』
1929年、140.0×81.0cm、カンヴァスに油彩、コラーージュ、
国立ソフィア王妃芸術センター蔵
Collection of the Museo Nacional Centro de Arte
Reina Sofia, Madrid
© Salvador Dalí, Fundació Gala-Salvador Dalí,
JASPAR, Japan, 2016.



© X. Miserachs/Fundació Gala-Salvador Dalí, Figueres, 2016.
Image Rights of Salvador Dalí reserved.
Fundació Gala-Salvador Dalí, Figueres, 2016



サルバドール・ダリ
《ウランウムと原子による憂鬱な牧歌》
1945年、66.5×86.5cm、カンヴァスに
油彩、国立ソフィア王妃芸術センター蔵
Collection of the Museo Nacional
Centro de Arte Reina Sofia,
Madrid
© Salvador Dalí, Fundació
Gala-Salvador Dalí, JASPAR, Japan,
2016.

時代を射貫く現代美術の先駆者

20世紀美術にとって欠くことのできない存在、その名はサルバドール・ダリ(1904-1989)。スペインが生んだ奇才にして、シュルレアリスム(超現実主義)で知られる最も有名なアーティストと言ってよいでしょう。少年時代から絵の才能に長け、1929年にパリの芸術界に彗星のようにデビューすると、やがて絵画のみならず、写真や彫刻、舞台美術から衣装やジュエリーのデザイン、映画制作に至るまで、じつに多彩な芸術活動を繰り広げ、つねに世界の耳目を集めてきました。そして彼の作品が放つ魅力は、21世紀に入っても輝きを増すばかりです。

見逃せない、ダリ・ワールド出現!

自らを「天才」と称して憚らなかつたダリの作品群を、一挙にご覧いただけるまたとない機会がこの夏やってきます。我が国では約10年ぶり、過去最大級の大回顧展です。

ガラ=サルバドール・ダリ財団(スペイン)、サルバドール・ダリ美術館(アメリカ)、国立ソフィア王妃芸術センター(スペイン)が所蔵する世界でも屈指のダリ・コレクションを中心に、日本国内からも重要作品を集めました。初期から晩年まで、ダリの多面的な創作活動を網羅するよう、油彩のほか、ドローイング、オブジェ、ジュエリー、書籍など約200点、圧巻の作品群がそろいます。

本展の美術品取り扱いにヤマトロジスティクス株式会社は協力しています。

開催期間 ▶ 2016年7月1日(金)～9月4日(日)
休館日 ▶ 毎週月曜日(ただし7月18日は開館)
開催場所 ▶ 京都市美術館(岡崎公園内)

アクセス ▶ JR「京都」駅北側の市バスターミナルA1乗り場から5系統岩倉行き、またはD1乗り場から100系統銀閣寺行き(急行)阪急「河原町」駅下車、「四条河原町」バス停から5系統岩倉行き、または32系統銀閣寺行き、または46系統平安神宮行き京阪「三条」駅下車、「三条京阪前」バス停から5系統岩倉行き→いずれもバス停「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ地下鉄東西線「東山」駅下車徒歩10分

開館時間 ▶ 9:00～17:00(8月11日、12日は19:00まで開館)
※入場は閉館の30分前まで

観覧料 ▶	一般	高大生	小中生
	当日	1,600円	1,100円
前売および団体	1,400円	900円	400円

※障がい者手帳提示の方は無料
主催 ▶ 京都市美術館(京都市)、ガラ=サルバドール・ダリ財団、サルバドール・ダリ美術館、国立ソフィア王妃芸術センター、読売新聞社、読売テレビ

共催 ▶ びあ
後援 ▶ スペイン大使館
特別協賛 ▶ キヤノン
協賛 ▶ 花王、損保ジャパン日本興亜、大日本印刷、大和ハウス工業、トヨタ自動車、三井物産、岩谷産業、きんでん、清水建設、非破壊検査
問い合わせ先 ▶ TEL 050-5542-8600 (ハローダイヤル)
ホームページ <http://salvador-dali.jp>
巡回情報 ▶ 東京会場: 国立新美術館
2016年9月14日(水)～12月12日(月)

平成29年度福祉助成金募集

ヤマト福祉財団は、障がいのある方々の収入が増えれば豊かで幸せな人生の夢が実現すると信じ、福祉施設が「経済的自立力」を兼ね備えることが、障がい者の望む「夢の福祉」であると考えています。

福祉施設の方々へのお手伝いとして、「経済的自立力」向上のため新規事業の立上げや生産性向上に必要な設備や機器の購入を支援する助成金事業を行っています。

応募期間

平成28年10月1日(土)から11月30日(水)まで

I. 障がい者給料増額支援助成金

- ジャンプアップ助成金 助成金額 定額500万円
- ステップアップ助成金 助成金額 上限200万円

II. 障がい者福祉助成金

助成総額 500万円(1件あたり最大100万円)

お問い合わせ先

公益財団法人ヤマト福祉財団 助成金事務局 TEL03-3248-0691
詳しくはホームページをご覧ください。

